大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

麻続王をめぐる歌二首

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 右富実 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011080

麻続王をめぐる歌二首

村田右富実

一　はじめに

万葉集巻一の天武天皇代を示す標目のもとに収められている歌は四組六首ある。本稿において扱う麻続王をめぐる歌二首は、その一首に皇族や王族と直接の関わりを持たない作者表記（「人」）を持つ点において特徴的である。

麻続王流二於伊勢国伊良虞嶋一之時人哀傷作歌

打麻乎　麻続王　白水郎有哉　射等籠荷四間乃　珠藻苅麻須（1・二三）

麻続王聞レ之感傷和歌

空蟬之　命乎惜美　浪尓所湿　伊良虞能嶋之　玉藻苅食（1・二四）

右案二日本紀一曰　天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯三位麻続王有レ罪流二于因幡一　一子流二伊豆嶋一　一子流二血鹿嶋一也　是云レ配二于伊勢国伊良虞嶋一者、若疑後人縁二歌辞一而誤記乎

麻続王については未詳。麻続王に関する記述は当該二首以外には日本書紀と常陸国風土記とに、

三位麻続王、罪有り、因播に流す。一子は伊豆島に流し、一子は血鹿島に流す。（天武四年四月十八日条）

此より往南十里に、板来の村あり。近く海浜に臨み、駅家を安置く。此を板来の駅と謂ふ。その西に、榎木、林を成す。飛鳥の浄御原の天皇の世に、麻続王を遣ひて、居まはせたまひし処なり。（常陸国風土記　行方郡）

と残るのみである。天武朝に罪あって流されたという点はいずれの伝にも共通するが、その流刑地は、「伊良虞」（万葉集）、「因幡」（日本書紀）、「板来」（常陸国風土記）と食い違いを見せる。実際に流罪にされたこと自体を疑う必要はなかろうが、流罪後、短いあいだに麻続王配流の伝は激しい朧化・伝説化をたどったものと思われる。

王族が配流されたという点に着目した西郷信綱氏「麻続王」（『万葉私記』一九五八年五月）、多田元氏「麻績王伝承の昇華―王伝の構想から―」（富士フェニックス短期大学富士フェニックス論叢第四号・一九九六年三月）は、折口信夫氏が「古代人の自然美観の展開」（太陽三二巻八号・一九二六年六月／「叙事詩の発生」の題にて『折口信夫全集　第一巻』所収）等において述べるところの、いわゆる〈貴種流離譚〉の枠組みを当該二首に援用しようとする。しかし、それは当該歌成立の可能性の一つとして考えられる類のものであり、なによりも、〈貴種流離譚〉の定義そのものを再検証する必要があろう。ほぼ同時代といってもよい時間帯の中にあって、最低でも三種の伝承が生まれたことは、それとして論の前提にせざるを得まい。

本稿では、そうした伝承の側から麻続王像に接近するのではなく、歌という様式を用いて麻続王配流事件を表現することについて、その文学史的な側面から考えてみたい。

二　研究史

当該二首に関する研究史上の画期となったのは、前掲西郷論文であろう。西郷論文は折口論文の述べる〈貴種流離譚〉を受け継ぎながらも、麻続王歌（1・二四）を、

つまり、この歌は王その人が歌っているのではない。題詞の「麻続王これを聞きて感傷して和ふる歌」といういい方は一の物語的擬制なのであり、第三者が王の身になり代って歌っているのだ。

として、1・二四番歌を麻続王の実作ではなく、仮託であると論じた。この点については、その後、

二三～四は、伊良虞に伝わった伝説の中の歌として、後人の作ったものである。（『日本古典集成　万葉集一』一九七六年十一月）

伊勢の伊良虞の島は、持統六年行幸の折の人麻呂作歌（四二）に詠まれており、王の配流地として不適。二三・二四の二首は、後の人による仮託の作と考えられる。（『和歌文学大系　万葉集一』一九九七年六月）

のように、後の仮託と断定するものもあり、また、断定とまではいかないけれども、

かなり早い時期に麻績王配流事件は伝説化し、伝承内容に差が生じたのであろう。（『新編日本古典文学全集　万葉集一』一九九四年五月）

と、実作の可能性の低さを指摘する注釈書もある。仮託の実年代をどう捉えるかは別にして、1・二四番歌を仮託とする説は

広く受け入れられているといってよかろう。本稿も1・二四番歌を麻続王の自作と考えようとするものではないが、その仮託の時期を同時代（天武朝）とするのか、後の時代（持統朝以降）とするのかという点についての論証は極めて困難であると考える。

また、日本書紀の正史としての史料性に重きを置くならば、天武四年（六七五）に何らかの罪によって因幡に流罪にされた麻続王の流刑地が伊良虞（あるいは板来）に誤伝されたうえで、伝説化したということは考えられよう。しかし、そうした伝説生成の原因が因幡、伊良虞、板来という地名の類同性に依存するのか（吉永登氏「いらこ島考」芸林第四巻一号・一九五三年一月／『万葉　その異伝発生をめぐって』所収）、あるいは逆に伊勢国（常陸国）に流されたという伝説が伊良虞（板来）の地名を呼び込んだのかは今となっては知る由もない。ここは、当該二首が万葉集の原撰部と目される部分に配列されている点（伊藤博氏『万葉集の構造と成立　上』一九七四年九月、他）に鑑みて、天武朝～持統朝にかけて当該二首が一対となって存在していたことを確認するにとどめておきたい。

三　人哀傷作歌（二三番歌）

1・二三番歌は、訓に若干の問題[注一]はあるものの、

打麻を　麻続の王　海人なれや　伊良虞の島の　玉藻刈ります

と訓んでよかろう。一首は、「海人なのだろうか、海人でもないのに玉藻を刈っていらっしゃる」と麻続王の立場を忖度しつつその現状を表現することを通じて、麻続王に対しての話者の興味を歌う。藻を刈る海人を歌うものの中には、

なかなかに　君に恋ひずは　比良の浦の　海人にあらましを　玉藻刈りつつ（11・二七四三）

なかなかに　君に恋ひずは　にほの浦の　海人にあらましを　玉藻刈る刈る（11・二七四三　或本歌）

後れ居て　恋ひつつあらずは　田子の浦の　海人にあらましを　玉藻刈る刈る（12・三二〇五）

といった類型表現が見られ、歌の表現上、海人であることが理想的な状態でないことは知られる。さらに、「藻」を刈る「海人」は、11・二七四三番歌（本伝、異伝とも）に「君に恋ひずは」とあるように、女性として形象されるようである。12・三二〇五番歌も「後れ居て」とあるように旅先の男を思っての歌

であろうし、集中に「海人」と「藻」とが一首に共存する他の歌は、この三例以外に八首あるが、それらもすべて「海人」は女性として歌われる。

潮干の　三津の海女の　くぐつ持ち　玉藻刈るらむ　いざ行きて見む（3・二九三）

～朝凪に　玉藻刈りつつ　夕凪に　藻塩焼きつつ　海人娘子　ありとは聞けど～（6・九三五）

玉藻刈る　海人娘子ども　見に行かむ　舟梶もがも　波高くとも（6・九三六）

梶の音ぞ　ほのかにすなる　海人娘子　沖つ藻刈りに　舟出すらしも（7・一一五二―注略）

難波潟　潮干に出でて　玉藻刈る　海人娘子ども　汝が名告らさね（9・一七二六）

これやこの　名に負ふ鳴門の　渦潮に　玉藻刈るとふ　海人娘子ども（15・三六三八）

我が背子を　我が松原よ　見渡せば　海人娘子ども　玉藻刈る見ゆ（17・三八九〇）

麻続王を女性と考える可能性もないわけではないが、ここは、単に「海人でもないのに」というだけではなく、性別をも乗り越えて、本来的には行うはずのない藻刈りをしていることへの興味を歌っているといってよかろう。また、その話者の興味の内容については、「題詞と無関係に見ると、罪人麻続王を揶揄する意を持ちうる。」（伊藤博氏『万葉集釈注　巻第一』一九九五年十一月）のように、王族たる麻続王が藻を刈っている現況を揶揄しているものなのか、それとも題詞にあるように「哀傷」しているものなのかは、歌表現からは判然としない。しかし、当該二首を何らかの形で有機的な関連を持つ歌群として論じようとする限り、その興味は、題詞にあるように「哀傷」として理解する以外になかろう。

当該歌は、流罪後早い段階において伝説化された麻続王の気持を忖度し哀傷する歌として天武朝～持統朝の頃に存在したと考えてよかろう。それでは、そうした白鳳期の歌として当該歌はどのように把握できるのであろうか。本稿においては、それを「時人歌」との関わりにおいて捉えてみたい。

四　「童謡」と「時人歌」

日本書紀に残る「時人歌」は「童謡」とひとしなみに扱われることも多いが、土橋寛氏『古代歌謡全注釈　日本書紀編』（一九七六年八月）によれば、「童謡」が、

童謡は（注略）は、何らかの社会的事件の前兆の歌か、批

評の歌であって、その歌い手（作者）は特定されておらず、事件当時の不特定の民衆が歌ったものとされている。

と、定義されるのに対し、「時人歌」は、

ワザウタは、独立歌謡としての顔と前兆の歌としての顔と二つの顔を持っているのに対し、時人の歌は社会的事件に対する批評の歌としての一つの顔しか持っておらず、その点は狭義の物語歌と同じである。その点から考えて、これらの歌が「時人」に仮託して物語の述作者が創作した歌であることは、ほぼ疑いない。

と、定義される。「時人歌」が「物語の述作者が創作した歌」であるか否かについては後述するとして、基本的な区別はこの土橋説に従ってよかろう。また、「童謡」が事件や出来事よりも前に歌われるのに対して、「時人歌」は事件や出来事の最中、ないし直後に歌われる点においても、「童謡」とは明らかに別個である（詳細は下表参照）[注二]。

さらに、機能的な区別を考えると、「童謡」はそこに解釈が施されない限り、まさに童謡（どうよう）でしかあり得ないのに対し、「時人歌」は歌の表現そのものが事件や出来事と深く関わる点に特徴がある。ここからも「童謡」と「時人歌」との相違は確かめられよう。そして、本稿においては、当該歌の歌表現が麻

時間	童謡	時人歌
前	一〇七（皇極・短歌） 一〇八（皇極・不定型） 一〇九（皇極・片歌） 一一〇（皇極・短歌） 一一一（皇極・短歌） 一一二（斉明・不定型） 一一五（天智・短歌） 一一六（天智・不定型） 一一七（天智・短歌） 一一八（天智・短歌）	
後	一二四（天智・不定型）？	
最中 直後		一九（崇神・短歌） 二〇（崇神・短歌） 二四（景行・短歌） 八四（清寧・短歌） 一〇五（舒明・短歌） 一一二（皇極・短歌）

続王事件と直接する点から、「時人歌」との関連を考えたい。

日本書紀に残された「時人歌」は以下の六例。

（ア）箸墓の「時人歌」

～故、大坂山の石を運びて造る。～人民相踵ぎて、手逓伝にして運ぶ。時人、歌して曰く、

大坂に　継ぎ登れる　石群を　手逓伝に越さば　越しかてむかも（紀一九―崇神十年九月）

（イ）出雲振根と飯入根の「時人歌」

～弟木刀を抜くこと得ず。兄、弟飯入根を撃ちて殺す。故、時人、歌して曰く、

八雲立つ　出雲武が　佩ける太刀　黒葛多巻き　さ身無しにあはれ（紀二〇―崇神六十年七月）

（ウ）御木の行宮の「時人歌」

～筑紫後国の御木に到り、高田行宮に居します。

～百寮、其の樹を蹈みて往来ふ。時人、歌して曰く、

朝霜の　御木のさ小橋　群臣　い渡らすも　御木のさ小橋（紀二四―景行十八年七月）

（エ）忍海の角刺宮の「時人歌」

～天皇の姉飯豊青皇女、忍海角刺宮にして、臨朝秉政し、自ら忍海飯豊青尊と称りたまふ。当世の詞人、歌して曰く、

倭辺に　見が欲しものは　忍海の　この高城なる角刺の宮（紀八四―顕宗紀、清寧五年正月）

（オ）境部臣毛津の自殺の「時人歌」

～乃ち出でて畝傍山に入る。～毛津、走げて入る所無し。頸を刺して山中に死せぬ。時人、歌して曰く、

畝傍山　木立薄けど　頼みかも　毛津の若子の　籠らせりけむ（紀一〇五―舒明前紀）

（カ）常世の神の「時人歌」

～「常世の神を祭らば～」～秦造河勝、民の惑はさるるを悪みて、大生部多を打つ。其の巫覡等、恐りて勧め祭ることを休む。時人、便ち作歌して曰く、

太秦は　神とも神と　聞え来る　常世の神を　打ち懲ますも（紀一一二―皇極三年七月）

これらの歌々を通覧するに、その特徴は以下の五点にまとめられよう。

①歌表現の一部に、事件や出来事に関わる固有名詞、あるいはそれに準ずるものが含まれていること（傍線部参照）。

②作者には興味が示されないこと（枠部参照）。

③短歌形式であること。これは童謡が不定型の歌を含む

のに対して特徴的である。

④歌われるのは事件や出来事の最中、あるいは直後であること。

⑤歌表現に事件や出来事に対して、話者の感想が含まれること（圏点部参照）。

これら五点はいずれも、すべての「時人歌」に見られるものであり、「童謡」との比較においても「時人歌」の特徴と捉えてよいであろう。

また、前掲土橋著は「時人歌」を書紀述作者の作としたが、「時人歌」の方法が七～八世紀に存在したことを否定するには至るまい。たしかに、現在我々が見ることのできる「時人歌」の多くが書紀述作者の作である可能性は高いが（特に、崇神紀や景行紀のもの）、逆に日本書紀におけるこうした「時人歌」の存在は、人々の耳目を集める事件や出来事が起きた直後にそれに関わる歌が人々のあいだに流布したであろうこと、あるいはそうした歌を作ることが一般的であったことを、より積極的に証すると思われる。また、個別に見ていった場合も舒明前紀や皇極紀の歌を積極的に書紀述作者の手になる仮託とする根拠は見当たらず、すくなくとも白鳳期には、実際に「時人歌」が歌われていた蓋然性は高いと見るべきであろう。

五　二三番歌と「時人歌」

「時人歌」を上述のように捉えてよいとするならば、その特徴は1・二三番歌にも明瞭に見てとれる。すなわち、①歌の表現上に事件に関する固有名詞が登場し（麻続王）、②作者に興味は示されず（人）、③短歌形式であり、④事件最中（後）の詠であり、⑤話者の感想が歌われる（海人なれや）。

麻続王流二於伊勢国伊良虞嶋一之時、人哀傷作歌

打麻を　麻続の王　海人なれや　伊良虞の島の　玉藻刈ります（1・二三）

当該歌は「時人歌」の一つとして把握してよいであろう。(注三) こうした捉え方は、全く別の観点からの論証であるが、伊藤博氏「日本書紀と万葉集」（『万葉集の構造と成立　上』一九七四年九月）も述べるところである。長くなるが、重要な指摘でもあり、引用する。

舒明紀以降の書紀歌謡において特徴的なことは、史実をめぐる諷諭の歌が多いことである。すなわち、舒明紀の一首は「時人」の歌（一〇五）、皇極紀の七首のうち、六首は「童謡」（一〇七）「猿」の歌（一〇八）「謡歌」（一〇九～一一）「時人」の歌（一一二）であり、斉明紀の八首のう

ち一首は「童謡」（一一二二）、天智紀の五首はすべて「童謡」（一二四～八）であって、計二四首のうち一三首までが諷諭の歌である。杜会時評に供された物語歌であって個に即する歌ではないのである。ところが、この種の歌は、舒明～天智朝の万葉歌には一首も見られない。このことは、歌をめぐって、紀と集とが対立することを示すあからさまな現象と称すべきである。

といっても、天武朝の万葉歌には、

麻続王、伊勢の国の伊良虞の島に流さるる時に、人の哀傷びて作る歌

打ち麻を麻続の王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります（巻一、二三）

という、当面の書紀歌謡（とくに一〇五・一一二）に類する「時人」の歌がある。題詞は、歌詞から導かれたらしい気配が濃く、天武紀四（六七五）年四月の「三位麻続王有罪流二子因幡一」（万葉の左注にも引用あり）の記録には合わないけれども、麻続王の配流をめぐって〝時人〟の歌があり、それが書紀に採録されうる性格を持っていることだけは否定できない。題詞を離れれば、歌は罪人麻続王を揶揄する意にもなりうることに注意したい。しかし、このばあいは、歌謡を含まない天武紀に対応する時代の歌であることを見のがしてはならない。天武朝に至ってこの種の万葉歌が登場するのは、すべてを網羅しようとしたかどうかはともかく、天武朝以降においては「歌」は別途に集成しようとしたからと見られるのであって、採録可能の万葉歌が舒明～天智朝になく天武～持統朝のみに見られたことと同様に、むしろ、歌における紀と集との対立の保証に役立つものといえよう。

このように見て来ると、本稿は日本書紀と万葉集との対応関係にまで踏み込む伊藤論文の指摘を、歌の機能的な面から補足したに過ぎない。しかし、当該贈答の成立事情をめぐって、前掲『万葉集釈注　巻第一』が、1・二四番歌についてそれを持統朝における仮託だとしたうえで、

のちの仮託だということになれば、その時期は、天武朝より一つ下がる持統朝あたりと見るのが自然であろう。持統六年（六九二）三月、持統女帝が伊勢に行幸している。麻続王事件から十七年後である。二三番歌のような歌が伊良虞の地に伝えられていたことが契機となり、宮廷人たちがこの折に、先代の罪びとに思いを入れつつうち興じたものであろうか。

と、述べるのはいかがなものであろう。地名に関する矛盾は常陸国風土記の記述もあり、ここに論理的な整合性を求めるのはそもそも無理があると思われる。この点については伊勢に流されたという同時代的な伝承があったと捉えるしかないであろうし、当該和歌（1・二四番歌）だけを取り上げて、あえて後代の仮託とするだけの積極的な理由づけは不可能であろう。

その成立事情を別にすれば、1・二三番歌は「時人歌」そのものといってよいほど濃厚に「時人歌」としての性格を持ちあわせている。それでは、「時人歌」として定位できる1・二三番歌に和する1・二四番歌はいかなる性質を持ち備えているのであろうか。

六　麻続王感傷和歌（二四番歌）

1・二四番歌の訓は、結句「玉藻苅食」を「玉藻かりはむ」（『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』『和歌文学大系』など）と訓むか「玉藻かりをす」（『日本古典文学大系』など）と訓むかに説が割れている。原文「食」は、

豊国の　企救の長浜　行き暮らし　日の暮れ行けば　妹食序念（12・三二一九）

かはづ鳴く　清き川原を　今日見ては　いつか越え来て見乍偲食（7・一一〇六）

とあるように、「はむ」「をす」共に可能な訓であり、いきおい歌の解釈から訓を決定せざるを得ない。しかし、こうした方法はともすれば循環論理に陥りやすい。今は暫定的に

うつせみの　命を惜しみ　波に濡れ　伊良虞の島の　玉藻刈り食む

と、訓んでおく。一首は「命が惜しいので、波に濡れながら伊良虞の島の藻を刈って食べている。」という麻続王の食生活を歌うものである。あえて「命を惜しみ」と歌う点を考慮すれば、その食生活は、命長らえることを目的とした貧しいものであることは間違いなかろう。

そこで、「命」を「惜し」と歌う点に着目してみると、集中に「命」と「惜し」とが共存する歌は全十例（当該歌を含まず）。うち、自分の「命」に関して歌うものが九例とその大部分を占める（例外は19・四二一一番歌のみ）。その九例の内訳は、「命」を「惜しくない」と歌う相聞歌が五例（9・一七六九、11・二六六一、12・三〇八二、15・三七四四、16・三八一三）。いずれも、恋のためならば、自分の命は惜しくはないという、

かくのみし　恋ひし渡れば　たまきはる　命も我は　惜しけくもなし（9・一七六九）

の類型に収まるものである。一方、「命」を「惜しむ」は、三例。

～およしをは　かくのみならし　たまきはる　命惜しけど
せむ術もなし（5・八〇四　山上憶良「哀世間難住歌」）

～たまきはる　命惜しけど　せむ術の　たどきを知らに
かくしてや　あらしをすらに　嘆きふせらむ（17・三九六二　大伴家持）

～たまきはる　命惜しけど　せむ術の　たどきを知らに
隠り居て　思ひ嘆かひ～（17・三九六九　大伴家持）

こちらは憶良の「哀世間難住歌」（5・八〇四）をその始発と考えてよかろう。このように見ると、「命が惜しいので藻を刈る」と歌う当該歌は、集中にあって特殊な位置を占めていることがわかろう。己の「命」を客観的に叙し、さらに、男性である自分が本来しないはずの藻刈りの目的をその「命」に認めるというのである。この特殊性は麻続王が伊良虞に流されたという出来事が言い伝えられている状況においてのみ有意となる。

すなわち、当該歌は1・二三番歌に対する和歌として極めて個別性の高い歌であり、「時人歌」として機能している歌に、事件の当事者その人が和した歌として定位できよう。伝説中の当事者詠といっても過言ではない。

初期七夕歌（人麻呂歌集所出の七夕歌）の特徴の一つに当事者詠の多さがあげられるが（稲岡耕二氏『人麻呂の表現世界』一九九一年七月、身崎壽氏「人麻呂歌集七夕歌の作中主体」『日本古典文学の諸相』一九九七年一月、品田悦一氏「人麻呂歌集の七夕歌」『セミナー万葉の歌人と作品　第二巻』一九九九年九月、他）、当該歌の方法はこうした初期七夕歌のそれに極めて近いものと考えられよう。人麻呂歌集初出の七夕歌のすべてを天武朝における詠作と捉えてよいかどうかは問題もあるところだが、なお白鳳期の歌のありようとして把握できると思われる。

出来事や事件、あるいは伝説の当事者を歌の話者に据えることが、歌の方法としてどのような意味を持っていたのかについては、今は問わないけれども、当該歌は巷間の事件である麻続王の配流に関わる「時人歌」に麻続王その人が和するという、これまでになかった新しい歌の方法であったと思われる。勿論、実際には麻続王自身が和するべくもなく、誰かが事件の当事者である麻続王に成り代わって作ったことは疑いない。いいかえるならば、1・二四番歌は麻続王事件という同時代性の極めて高い伝説、その伝説内部の当事者詠といえるであろう。

七　むすび

当該二首は、麻続王事件には直接関わりのない第三者が伝説内の当事者の気持を忖度して歌う「時人歌」と、その「時人歌」をまっこうから捉え、和してゆく伝説内部の当事者詠から成立していた。同時代性の極めて高い伝説における第三者と当事者との贈答（1・二三番歌は麻続王に送ったと記されているわけではないから、厳密な意味において、贈答とはいえないが）といってもよかろう。

舒明前紀に見られるような「時人歌」の方法が口誦の時代に根生いのものである可能性と、当該二首が天武朝に配列されており、口承と記載との狭間に位置している点を考えるならば、口誦歌（1・二三番歌）と記載歌（1・二四番歌）との接触の瞬間をこの二首に見出すことも可能ではあろう。しかし、そのためには天武朝における和歌の書記の具体的なありようや、七夕歌の記載性の問題を考慮に入れざるを得ず、今はその可能性を述べるにとどめたい。

また、伝説内の当事者への強力なベクトルを持つ1・二三番歌は伝説の主人公に積極的に関わってゆく「吉備津采女挽歌」（2・二一七～二一九）へ、また、伝説内の当事者詠（1・二四番歌）は「鴨山自傷歌」（2・二二三）への方法的展開を担うようにも思われるが、この点については別稿に期したい。

注

一　初句「うちそを」と訓むか、「うつそを」と訓むかで説が割れるが、歌の解釈に直接影響を与えるほどではない。

二　表の凡例は以下の通り。
・紀一二四番歌は一応、時間的には法隆寺の火災の後兆として「後」に分類したが、壬申の乱の前兆の可能性も否定できない。
・「童謡」の認定は、前掲土橋著に拠った。
・「童謡」のうち、紀一〇八番歌は「猿の歌」、紀一〇九番歌～紀一一一番歌は「謡歌」。
・「時人歌」のうち、紀八四番歌は「当世詞人」の歌。

三　当該歌を「時人歌」として捉える先行研究には中西進氏『万葉集』（講談社文庫）、前掲多田論文などがある。

（むらた　みぎふみ・本学助教授）